村上忠順翁顕彰会報

よのうさはきかじ
もとめでしめやかに
ひとりふみしる

目　次

- あいさつ…… 2
- 東征日記…… 3
- 歴史探訪記…… 6
- 表紙のことば…… 6
- 平成３年度事業報告・決算報告…… 7
- 平成４年度事業計画・収支予算（案）…… 8

村上忠順翁顕彰会報
第　３　号
編集　村上忠順翁顕彰会
事　務　局
発行　平成４年５月１日

平成四年度 定期総会によせて

豊田市長 加藤正一

うららかな季節を迎え、村上忠順翁顕彰会会員の皆さんに謹んでご挨拶申し上げます。貴顕彰会は、平成元年に発足して以来着実な活動を進められ、ここに早や四回目の定期総会を迎えられ、ご盛会を心よりお慶び申し上げます。

当地域では、本年度早々に高岡コミュニティセンターがオープンし、地区公民館とともにコミュニティ活動や歴史・文化などの生涯学習に幅広い活用が期待されています。

私は、これからのまちづくりについて、この地を二十一世紀を担う子供たちに誇りを持って託すことのできる「ふるさと」にすることであると痛感しています。すなわち、暮らしのなかでの安心、都市のうるおい、そしてそれを支える都市の活力づくりなどを二十一世紀未来計画に網羅しました。そして、豊かな自然や貴重な歴史にもう一度しっかりと目を向け、人やまちづくりに対して「のどかさ」を大事にした施策を考えてまいります。

貴顕彰会の益々のご研賛と会員各位のご健勝を祈念申し上げてお祝の言葉と致します。

平成四年度 定期総会にあたり

村上忠順翁顕彰会会長 石川隆之

「人はみな一重のきぬにかえつれど、八重山吹は猶さかりなり」村上忠順集九ページ。月日はめぐり、さわやかな季節を迎え会員の皆さまにはお変りもなくご健祥のこととお察し申し上げます。

村上忠順翁顕彰会も皆さまと共に「地域に歴史を感じ文化の香を求めつつ」を目標に発足以来着実な歩みをつづけ早や四度目の総会を迎えることとなりました。前年度は、村上忠順集（座右記）第三巻目を復刻し会員の皆さんに配布し、又研修にはバス二台を連ね歴史探訪《忠順の足跡と塩のみち》を企画し、忠順の足跡をたどり、塩のみち足助街道から飯田街道を北へ北へと矢作川原流の南信平谷村まで往復一八二キロメートル余りのゼミナールを実施しました。

稲武の里古橋懐古館では忠順の足跡を確めることができ往時をしのぶひとときを得たよろこびは何によりの収穫でした。迎える新年度は会員の皆さんと共に未知の多い忠順翁の偉大な業績を少しでも明らかにし学ぶことにより顕彰の輪を広げ、ふるさとの文化に寄与したいと願うものです。

村上邸

「東征日記下」（慶応四年、村上忠順稿）

築瀬一雄

解説

「村上忠順集」の第三集に翻刻した「座右記」によると、慶応四年（一八六八）三月二十一日に、忠順は次の願書を刈谷藩の役職に提出している。

私義不存寄大総督　有栖川宮様より御用之義有之趣二而被為召候間急速駿府御本陣迄罷出候様御達ニ付右御用済迄御暇頂戴出仕度奉願候此段不苦思召候者御家老中迄被仰上可被下候以上

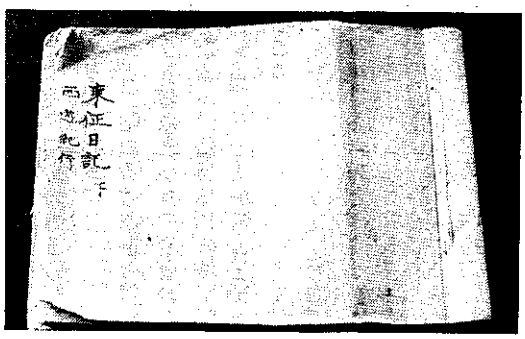
三月廿一日　　村上承卿（コノ口上書ケンニカク）

山田□之進様

この願いは直ちに聞き届けられ、廿二日に発足、廿五日に駿府に着き四月十五日に江戸西ノ丸入城、六月朔日江戸出立、六月八日刈谷着となるのである。

さて、村上家には、この時の日記が残っている。「東征日記下」とあって、前半にあたる部分を欠くのはすこぶる残念であるが、せめて残欠部なりと翻刻しておくことにしたい。

料紙は懐紙を二つ折りにして重ねこれを更に左右に折って、横丁本にした仮綴じの草稿である。縦一二・二センチ、横一六・七センチである。表紙に「東征日記下」とし、それに並べて「西遊紀行」とあるのは、明治九年の関西旅行の記録である。前者は十六丁、後者は七で、その後に七丁分の余白がある。



東征日記下

東征日記下

五月九日。かろうじて晴たり。此ごろのつれ〴〵に、人々歌よみて、おのれに引なほしてよとこはるゝ事、二度三度なりき。けふも又よみいで、後の題をとこはる。おのが家の月次のまけ題にてよみてんやといへば、いとよかなり。それいかでというまゝに、ふところよりと出てえさす。

此月は、閑居撫子・浦蚊遣火・白鷺立江の三つなり。おのれもよみ試む。

こぼるれば我袖ねれぬ独ゐてかつちりはらふなでしこの露

自こぞのたねもやこぼれつらむかわれならで蒔人もなき撫子の花

かつまもよ　みかつまもち　とがまもよ　かまぼもち夏の野の小草をかると　朝夕に　かよふ處女も　淺ち原

まぐさを刈て　遠近に　かよふわらはも　立よらぬ　さびしき宿は音もせぬ　わびしき庵は　垣ねには　葎おひたり　まがきには　薄しげる　つれ〴〵と　さぶしきまにま　手すさびに　刈そけぬれば　生しげる　むぐらが中に　あはれにも　撫子さきぬ　しげりあふ　すゝきの中にかなしくも　床夏咲ぬ　いつのまに　生いでにけん　いつしかも　咲出ぬらむ　かねてより　かくとしりせば　かゝらむと　とくしらませば　露をだに　はらはんものをちりをだにすゑざらましを　おろかにも　怠りけるか　あはれ撫子

浦蚊遣火

浦人のたつるかやりびむせぶ也たくやもくづも打しめるらむ

今年はいかなるよき年にかあるらむよろづ古の政に立かへらせたまふこそめでたけれ。かゝるめでたきをりしも、猶ひがひがしきしれもの有て、大王にいむかひ奉れり。やすからずきこしめして、なにがしの宮にことむけよと詔したまひければ、皇軍あまたあともひて、江戸の大城に入おはしませば、あたどもみながらまつろひぬるこそうれしけれ。おのれも此みいくさの内にめしたまひければ日ごろ有けるを、五月雨ふれはれてつれ〴〵なる夕ぐれ、高どのにのぼりて、はるかにみやれば、芝のかたにありて、煙いみじうみゆめり。

えみしが舟にたくなるにやと、かたへの人にとへば、あらず、こはあまがふせやのかやりびにこそ。蒸気とかいふめる舟のけぶりは、いますこし高うこそといふに、をかしうもおもほえて、

から舟の煙にはあらであまの子がかやりたくなり竹芝の蒲

かううめかるゝも、「民（よもに）のかまどはいまぞとみたる（にぎはひにけり）」とかや聞ゆる古の

大まつりごとに立かへるけぶりにも思ひよそへられてなむ。

白鷺立江

濁江にひねもすなにをあさらむ
世のうき事もしらさぎにして
五月雨はる、夕まぐれ日の入江こそさびしけれ　なにをあさるかしらさぎのみの毛干らん芦がくれ

十日。小雨そぼふる。日本橋辺見あるきて、かへる。夜に入て、鴨東八景の歌よみたりとて、見せたり。

いづれも難あり。わずかに二首にしるしして、かへす。ついでに、おのれもよみ試む。

大仏秋月

さやかなる月にむかへば豊臣のむかしの秋も忍ばる、かな

叡嶽暮雪

東路の岑いかならむいひしらぬ都のふじの雪の夕ぐれ

鴨水千鳥

こゑさむし水音きよしさよふけてかもの川せに千鳥鳴也

祇園夕照

かみぞのの朱の玉垣にほふまで夕日てりそふ杜のもみぢ葉

清水晩鐘

きよ水のたきの糸水むすぶまに永き日かげも入相のかね

糺川夜雨

さよふけて雨やふるらんたゞす川河音清し水まさるらし

三條晴嵐

霧はる、橋のうへ行をとめごがもすそあらはに嵐ふく也

霊山帰帆

此夕淀の川舟かへるらし白ほみゆめり山松のまに

十一日。雨ふる。歌道の献言よろしきよしのたまへり。岩倉の君西丸に入たまふ。陸奥白川の城、賊兵入ゐしを、官軍とりかへしたりといふ説きこゆ。

廿日あまりふる五月雨に川はあふれ橋はおちぬときくはまことか

十二日。けふも猶ふる。深草人飯田忠彦が八回忌に、夏懐旧といふ心をよみてよと、其子左馬がこふま、になき人の玉かあらぬかふか草の野べの蛍にむかしとはばや深草ののべにてる火はむかし人窓にあつめし蛍なるらん

十三日。ひねもすいみじうふる。

廿日あまり三日のながめに眺めわびぬいざつくろはん雲のほころび

十四日。猶いみじうふる。夕がた、はつかにはれたり。

廿日あまり日のめをだにもみざりしを雲まの月の珍しきかな

十五日。朝雨。午後やむ。上野にたむろしたる彰義隊を討とて、暁より廿藩の兵をくりいだす。五つ時より戦はじむ。夕がた、上野ことゞく焼たり。市中、広小路、湯島のあたり、日ねもすやく。烟一里ばかりひろがり、火雲をやくばかり高くもえあがる。賊兵あまた討死す。

此夕そらも心もはれにけり月はさやけしあたは亡びぬ

夜ふけて、黒門のあたり、白気四すぢたつ。白気のすゑ、黒色になれりといへり。

十六日。雨ふらず。いみじうあつし。岡雄庵がえさせたる花あやめを、祖母の命に奉る。夜。赤坂辺火。勝安房守が家をやきしなるべし。輪王寺の宮は、上尾久村次郎エ門におはしますよしいへり。

うへ野なるほうしゃいづらかな筒の玉の中わけをくに出にけり

十七日。雨ふる。こ、かしこにて、賊兵とらへ来る。

をちこちのあたとらへ来てつなぎおけば江戸の巷は静まりにけり

十八日。小雨ふる。上野のやけあとを見にものす。賊兵の屍を、鳥あつまりてくひちらす。臭気たへがたし。屍五十斗も有べし。やけあと、猶烟出る處あり。

此うへの恥はあらじな人はしに寺はやかれて野と成にけり天皇にまことつくさぬむくいにておほをそ鳥のゑと成にけり

母君にもちひ、菊の花を奉る。夜もすがら、いみじうふる。上御違例。柴明消毒。森田健介。

十九日。ひねもすよすがらふる。人々、故郷盧橘・深山照射・旅宿契恋のうたよみて、よしあしをとふ。題にかなはぬなどありて、よくもあらず。おのれもよみ試む

人はあらで宿はふりにし軒にしも花橘のかこそかはらねやくのこそ麓にみしか此夕あなたの岑にともしさしたり千代としもなに契るらんさ、枕一よかりねのべの情によもすがら雨風いみじければ、いねがてにしてありぬ。此雨風をとぢめにて、なが雨はれなんと思しもしるく、廿日の巳の時ばかりはれたり。

宋板大柴鈔

廿日。

みそかあまりおぼほしかりし心さへはれてうれしき五月雨のそら

廿一日。くもれり。夜二時ばかりによめるうた。

朝夕に心のやすむひまもなし君を思ふとあたをねらふと

いかにして君の恵をさとすべきあづまえみしのをさめがたさよ

うまれ出しかひ有けりな古に立かへる世にあへらく思へばえみし舟くつがへらねと祈かなとほき嶋より我国の為
怠らず猶いのらばやあづまうちえみしうたむの心一つにかくばかり物は思はじ夷らと東しこをの世になかりせば
君の為国の為にとしれ人もなきてをいだす御代にも有かなくなたぶれあづまえみしは高みくらたかきみかげをしらずや有らむ
けふも又えも打あへぬ等閑にあたの屯をやくぞかなしき
ことしあらば打もいづべく思へども老ぬる身こそつれなかりけれ
さりともと世をこそいのれ天つ社国つ社にぬさ手向つ、白川のあたおひそけて官軍の入かはりぬと聞ぞうれしき
すべらきの神のみことのありとしもしらぬ東の夷いかにせむ
せめなくにまだきもあたのかくる、か山のはやきてにがさずもがなそら言の多き世こそはうれたけれかたるもいふも誠ならねば
たてぬきに行かふ人はあまたあれど道こそなけれむさしの、原
ちよろづにいのる心の一つだに神し守らばうれしからまし
つかふとていざふみわけむ武蔵野の大城の庭にしげる夏草
手もすまに斬てはふりてきためむをあないひしらず老にける身はとも〳〵にかたらふ人もなかりけり言挙せずはありがたき世に

ながらえてとにもかくにもつかへてむすみだ川原の澄かへるまでにくしとは思うものから打えねばいきどほろしくも思ほゆるかな
ぬるまだに忘れかねつ大王にいむかふたぶれうたむ心は
ねじけ人うたでやまめや国の為君のみために心おこして
野となりし江戸の大城をみわたせば薄のみこそ生しげりけれ
はれやらでながめがちなる此比もうへ野をみれば心すゞしも
人よりも我は百千に物ぞ思ふみ国たふとむ心づくしに
ふして思ひおきて軍のばかり事千々にはかるも大君の為
へだ、れる故郷人もつれ〳〵に我をこふらし五月の雨の比
ほすひまもなきぞわりなき旅衣きつ、ぬれにし五月雨の空
まつろはぬあたのすみかを尋かねきかみたけびて物をこそ思へ
宮の為と偽しつ、つどひたる上野のあたを討ぞうれしき
武さし野にしげるしこ草老ぬれば駒こそはまね刈人ぞほし
めに近くうへ野のかたをみわたせばそらもこがれてほのほ立也
物のふのいきを立べき時なれや夷はきたりあたはつどひぬ
山のおく海のそこまで古に世を引かへす人をたづねむ
五十あまり身はふりぬれど呉竹の世を助べき一ふしもなし
ゆくりなくあたや入こむ時のまも心たゆむな皇軍の徒
夷らにしたがふべしや国のため山はさくとも海はあすとも
世ををさめ民をあはれぶ詔き、しる人の無ぞかなしき
我国はおほにはあらず日の神のあれまし、国ぞあふげえみしら○
江戸治まりしづ安かれと祈のみ我
朝夕の思ひなりけり○
夷らを六十にちかき老の身もうたざらめやとをたけびぞする○
みじかよもいねがてにして陸奥のあたやいかにと思ひこそやれ○
あたうたで日数へぬればうき雲も心もはれず五月雨の比○
我心なぐさめかねつむさし野のしこのしこ草刈もつくさで
井の水のいたくにごれる西の丸世にすむべしと思ほえなくに
うれたくも思ほゆるかな大君にまつろひあへぬ人多き世は
ゑに書て世人あざむく江戸人のさかしらみればにく、も有かな
をちこちにつどふしれ人打きため都に帰るたばかりもがな
葵草一本ゆゑに武蔵野はなべてゆ、しく思ほゆるかな
徒に月日立こそやさしけれ東えみしを討あへずして
えみしらになにかあたへむ神代より堅めおきして大和しまねを
大方は罪をなだめてすくはじなつどへば人のあたとなるもの
神やしる君の為とて世をぞいのるよを思ふ故に身をば思はず
君が為世をたくすべき人もあらば谷の底まで尋ね入ばや

つづく。

歴史探訪記

忠順の足跡と塩のみち

十月一日、あいにくの雨。参加した会員の皆さんのふん意気は以外と明るく楽しい一日になりそうである。早速く予定どおりバス二台で塩のみち中馬街道へと北に向けて出発した。

今回の歴史探訪のために十五ページほどの「しおり」を用意した。内容は道々の地名、歴史、街道、寺、史跡など少し欲張ったので活字が小さくなり読みづらい資料となってしまった。

はじめに大鷲院の磨崖仏を見学した、この寺は天台宗から曹洞宗に改宗したという古刹である。立派な山門には山岡鉄舟筆「正法」の扁額がある。全山をうめる岩壁には百観音と八十八体の弘法大師像が彫られており県下では珍らしいものである。

文化十三年の大災害にまつわる大石垣の前に立つと名古屋城の石垣が脳裏に浮び思わずため息をつく。

時間を気にしながら次の古橋懐古館へと向う。

懐古館は、主に古橋家六代源六郎暉児（テルノリ）、七代義真（ヨシザネ）の一大コレクションと言われ、貴重なものばかりで一日や二日でとても見きれるものではない。今日私達が一番期待することは忠順の足跡をここで確認したいことである。

古橋家奥方の説明によれば、当家へ多く人が訪れ宿泊したその記録が保存されており、その中には村忠順の名が見え「古橋家の歴史」に記されてあると聞きゃやはりゃとうなづいた会員は多かった。なぜ稲武へ、の疑問は残る、それは時代の背景や交友、医学等の面からの調査が必要であろう。

忠順の足跡十三里（約五十キロメートル）をしのびつつ次へと出発。

中馬街道を更に北へ十キロ、長野県境の杣路峠（ソマジ）に狼煙（ノロシ）台跡がある。信玄のころここは伊奈南方の要塞で、三河を一望し、ここから飯田、釜沢岳、八ケ岳へと煙を合せ甲府まで急を報じたと言う。

小雨なお降りつづく中次の目的地である月瀬の大杉に着く。この大杉は国の天然記念物に指定されておりその太さと雄大な姿に接し皆んな言葉が出ないほどであった。

古来、大木には神が宿ると聞く、まさに霊気さえ感じた、これは私一人ではなかろう。

月瀬村は、現在根羽村へ合併し偏入されている。根羽村は伊奈街道との結接地でもある。

更にバスを進め信玄塚を車中より見学し赤坂峠を登ると平谷村に入るまず目に入るのが村おこしのため山肌をけづっての施設づくりの現場風景である。ここは矢作川最上流の村で更に北へ峠（治部坂）をこえると浪合村である。

平谷、浪合の村界に大川入山（標高一九〇八メートル）があり分水領であり矢作川の源流となっている。

バスは峠の中程で折返しである。ここからの眺望は無情にも視界ゼロに近く、治部坂峠、蛇峠山、大川入山そして谷底に見えるはづの青い清流も姿をかくしている、又もう一つの楽しみであった紅葉も今一つ生彩を欠き残念この上もなくお互いにくもるガラスを指でふき額を寄せて片道九〇キロの旅を折り返し途中明治用水涵養林に車を止め見学し、上矢作町を経て矢作ダムに至り今日最後の見学と休けいをとった。

山にかかる雨雲は、手がとどくほどであった。

稲武の里でたべた五平餅の味が思い出されるころ、いささかのつかれと余韻を残し、予定の時間を三十分すぎて全員無事帰ることが出来た。

表紙のことば

忠順晩年の肖像といわれている。

よのうさはきかじもとめで
しめやかにひとりふみしる

いかにもこの詩からそれがリアルによみとれる。

編集後記　今年は忠順翁没後一〇八年、松平親氏公は明年没後六〇〇年を迎え、大きなイベントがあると聞く。忠順翁顕彰会も平成とともに発足し、明年は五年を迎える、五年をふり返り小さなイベントでも開催できるとよい、明日のためにもと思う。

平成３年度村上忠順翁顕彰会事業報告書

月	事業名	説明
6	定期総会	9日　六鹿会館にて ビデオ観賞　題名……刈谷武士他 茶　会
10	研修	1日　バス研修 テーマ…歴史探訪〈忠順の足跡と塩のみち〉
	図書刊行	村上忠順集（座右記）復刻
4～3	会議	役員会（延12回開催）

平成３年度村上忠順翁顕彰会収支決算書

総収入額　984,319円
総支出額　476,022円
次年度繰越額　508,297円

収入の部

単位：円

項目	予算	決算	増減	説明
1. 繰越金	15,809	15,809	0	前年度繰越金
2. 会費	350,000	442,000	92,000	1,000円×442人
3. 補助金	300,000	300,000	0	市補助金
4. 寄付金	100	0	△ 100	
5. 利子	100	5,510	5,410	普通預金利子
6. 負担金	234,500	221,000	△13,500	図書復刻代個人負担金 500円×442人
7. 雑収入	100	0	△ 100	
合計	900,609	984,319	83,710	

支出の部

単位：円

項目	予算	決算	増減	説明
1. 報償費	30,000	4,000	△ 26,000	謝礼 2人×2,000円
2. 会議費	50,000	50,360	360	総会および役員会
3. 印刷費	524,000	315,180	△ 208,820	村上忠順集（座右記）復刻代
4. 通信費	10,000	6,019	△ 3,981	切手、郵送料
5. 旅費	160,000	0	△ 160,000	
6. 消耗品費	10,000	463	△ 9,537	文房具
7. 償還金	100,000	100,000	0	借入金返済
8. 予備費	16,609	0	△ 16,609	
9. 事業費				
合計	900,609	476,020	△ 424,587	

監査の結果適正であることを認めます。
平成４年４月16日

監事　石川光齊　神谷末明

平成４年度村上忠順翁顕彰会事業計画(案)

月	事業名	説明
5	定例総会	17日　高岡コミュニティセンター 講演　演題『忠順と紀行』・茶会
10	研修	テーマ『史跡見学』バスにて日帰り
9	図書刊行	村上忠順関係資料の紹介および図書刊行
5・3	会報発行	第３号・第４号発行
	役員会	随時開催

平成４年度村上忠順翁顕彰会収支予算(案)

収入の部

単位：円

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	説明
1 繰越金	508,297	15,809	492,488	前年度繰越金
2 会費	350,000	350,000	0	年会費1,000円×350
3 補助金	300,000	300,000	0	市補助金
4 寄付金	100	100	0	
5 利子	100	100	0	預金利子
6 負担金	60,000	234,500	△ 174,500	研修会バス代個人負担1500円×40人
7 雑収入	100	100	0	
合計	1,218,597	900,609	317,988	

支出の部

単位：円

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	説明
1 報償費	50,000	30,000	20,000	講師謝礼
2 会議費	60,000	50,000	10,000	総会および役員会
3 印刷費	830,000	524,000	306,000	忠順資料等刊行、会報発行
4 通信費	10,000	10,000	0	切手、郵便料
5 旅費	200,000	160,000	40,000	一般旅費、バス借上料
6 消耗品費	10,000	10,000	0	事務用品
7 償還金	0	100,000	△ 100,000	
8 予備費	58,597	16,609	41,988	
合計	1,218,597	900,609	317,988	